

校定  
平家物語百二十句本

高  
橋  
貞  
一  
識

平家卷第二

一六六

第十一句

めいうんざするさい……………一六八

かくくはいほうしんわうしんざすの事

めいうんぞくみやう大なごんの大夫ふぢゐ

のまつ

えだこんばん中だうにいたつてさいくはう

じゆ

その事

しうけんほういんでんぼう

第十五句

平さいしやうなりつねをこいうくる事一八六

せう將きたのかたからす丸しゆく所いでら

るゝ事

せう將にし八でうくつしやうの事

少將ゐんの御所に御いとまごいの事

少將こひうけあんだの事

第十二句

めいうんきさん

大しゆせんざすうばいとるべきせんぎ

十ぜんじごんげん御たくせん

一ぎようあじやりのさた……………一七五

九ようのまんだら

第十六句

大けうくん……………一九二

大じやう入道ほうわうをうらみたてまつる

事

こまつどのにし八でうじゆぎよの事

こまつどのつはものそろひ

ほうじはうくはの事

第十三句

たゞのくらんどかへりちう……………一七六

六はらつはものそろひ

しん大なごんなりちかがうもん

さいくはうほうししきよ

第十七句

なりちかるざいせうしやうるざい……二〇一

しん大なごんはいしよにおもむかるゝ事

たんばのせうしやうをんるの事

ありきのべつしよ

あこやのまつのさた

第二十句

とく大じどのいつくしまさんけい……二二〇

とうのくらんど大夫いけんの事

大しやうのきせい

いつくしまのないしさねさだのきやうをゝ

くりたてまつる事

さねさだのきやう大しやうじやうじゆの事

第十八句

きかいがしまそとばながし……二〇八

やすよりしゆつけ

くま野くはんじやう

のつと

そぶ

第十九句

なりちかしきよ……二一六

なりちかしゆつけ

げんざへもんのじうのぶとしありきのべつ

しよへ

つかひ

きびつの中山にをひてどくがいの事

しん大なごんきたのかたしゆつけ

けいせいのさた

めいうんざするざい

ちしう元年五月五日、天だいざすめいうん大そうじやう、くしやうをちやうじせられける上、くらんどをつかはしてによりんの御ほんぞんをめしかへし、御ちそうをかいゑきせらる。そのうへちやうしをつけて、こんどじんよをだいいりへふりたてまつるしゆとのちやうほんをめされける。かゞの國にざすの御ばうりやうあり。もろたかこれをちやうはいのあひだ、もんとの大しゆよりてそしうをいたす。すでにてうかの御大じにをよぶよし、さいくはうほつしふしがむじつのざんそによつて、ことにちうくはにしよせらるべきよしきこえけり。めいうんはほうわうの御きしよくあしかりければ、いんやくを返したてまつりて、ざすをじゝ申さる。同十一日とばのみの七のみや、かくくはいほうしんわうを、天だいざすになしたてまつらせ給ふ。これはしやうれんみんの大そう正ぎやうげんの御でしなり。同十二日さきのざすしよしよくをとゞめらる。けんびいし二人におほせて、ひをけし水にふたをして、すいくはのせめにをよぶ。これによつて、大しゆさんらくすときこえしかば、きやう中またさはぎあへり。同十三日大じやう大じんいげのくぎやう十三人さんだいて、ちんのざにつき、さきのざすざいくはの事ぎぢやうあり。八でうの中なごんがたのきやう、そのときはいまださ大べんのさいしやうにて、ばつぎに候はれけるが、ほうけのかんじやうにまかせて、しざい一とうをげんじて、

をんるせらるべきよし見えて候へども、せんざすめいうん大そうじやうは、けんみつけんかくして、じやうかいぢりつの上、大じやうめうきやうをくげにさづけたてまつり、ぼさつじやうかいをほうわうにたもたせたてまつる。かつうは御きやうのしなり、かつうは御かいのしなり、かたぐもつてちうくわにおこなはれん事、みやうのしうらんはかりがたし。さればげんぞくをんるをなだめらるべきかと申されたりければ、たうざのくぎやうみなながかたのきやうのぎにどうずと申あはれけれども、ほうわう御いきどをりふかかりければ、なほをんるにさだめらる。大じやうにう道も此事申なだめんとて、おんざんせられたりけれども、ほうわうおりふし御かぜのけとて、御まへにもめされ給はねば、ほみなげにてたいしゆつせらる。そうをつみするならひとて、どゑんをめし返して、げんぞくせさせたてまつり、大なごんのたゆう、ふぢみのまつえだといふぞくみやうをこそつけられけれ。このめいうんと申は、むらかみの天わうだい七のわうじ、ぐへいしんわうより六代の御すゑ、こがの大なごんあきみちのきやうの御こ也。まことにぶさうのせきどく、天が第一のかうそうにておはしければ、君もしんもたつとみ給ひて、天わうじ六しうじのべつたうをもかけ給へり。されどもおんやうのかみあべのやすちかが申けるは、さばかりのちしやのめいうんとなりの給ふこそ心えね。上に日月のひかりをならべて、したにくもありとぞなんじける。にんあん元年二月廿日、天だいのざすにならせた給ふ。同三月十五日御はいだうありけり。中だうのほうざうをひらかれるに、はう一しやくのはこあり。しろきぬのにつゝまれたり。一しやうふぼんのざす、かのはこをあけて見給ふ

に、中にきなるかみにかける文一卷あり。でんげう大し、みらいのぎすの御なをかねてしるしをかれたり。わがなのあるところまで見て、それよりおくをば見給はず、もどのごとくにまき返してをかるゝならひなり。されば此そう正も、さこそおはしけめ。かゝるたつき人なれども、せんぜのしゆくぐうをばまぬかれ給はず。あはれなりし事どもなり。

同廿二日はい所いづの國とさだめらる。人々やうゝに申されけれども、さいくはうほつしふしがざんそうによて、かやうにはおこなはれけるなり。やがてけふみやこをいださるべしとて、おつたてのくはん人、しら川の御ばうへゆきむかひてをつたてまつる。そう正なくゝ御ばうをいでさせ給ひて、あはたぐちのほとり、一さいきやうのべつしよへいらせおはします。さんもんには大しゆおこりてせんぎしけるは、しよせんわれらがかたきは、さいくはうほつしにすぎたるものなしとて、かれらがおやこのみやうじをかいて、こんぼん中だうにおはします十二神しやうのうち、こんぴら大しやうのひだりのみあしのしたにふませたてまつりて、十二神しやう、七千のやしや、じこくをめぐらさずさいくはうふしがいのちをめしとり給へやと、おめきさけびてじゆそしけるこそきくもおそろしけれ。同廿三日一さいきやうのべつしよより、はい所へおもむき給ひける。さばかんのほうむの大そうじやうほどの人を、をつたてふしがまへにけたてさせて、けふをかぎりにみやこをいでゝ、せきのひがしへおもむかれけん心のうちをしはかられてあはれなり。大津のうちでのたまにもなりければ、もんじゆろうののきばのしろくゝと見えけるを、二めども見給はず、そでをかほにをしあてゝ、なみだにむせび給ひけり。

ぎをんのべつたうちうけんほういん、そのときはいまだこん大そうづにておはしけるが、あまりになごりをおしみたてまつりて、なく／＼あはづまでをくりまいらせて、それよりいとま申てかへられけり。めいうんそう正心ざしのせつなる事をかんじて、としごろ心中にひせられける天だいゑんせうの法もん、一しん三々はんのけちみやくさうしうのろんをちうけんにさづけられけるとかや。しやくそのんふぞく、はらない國のめみやうびく、なんてんちくのれうじゆぼさつより、しだいにさうでんしきたれるを、けふのなさけにさづけらる。わがてうはぞくさんへんちのさかひ、ちよくせまつだいといひながら、ちうけんにふぞくして、ほうゑのたもとをしほりつゝ、のぼられし心のうちこそたとけれ。さんもんには大しゆ大かうだうのにはに三たうくはいがうして、せんぎしけるは、そも／＼でんげうじかくちしう大し、ぎしんくはしやうよりこのかた、てんだいざすはじまりて、五十五代にいたるまで、いまだるざいのれいをきかず。つら／＼ことの心をあんずるに、ゑんりやく十三年十月にくはうていはていとをたて、大しはたうさんによちのぼり、四めいのけうぼふをひろめ給ひしよりこのかた、五しやうのによ人あとたえて、三千のじやうりよきよをしめたり。みねには一じうどくじゆとしふりて、ふもとには七しやのれいけん日あらたなり。かのぐはつしのりやうぜんは、わうじやうのとうほく大しやうのゆうくつなり。これじちいきのゑいがくも、ていとのきもんにそばだつて、ごこくのれいちなり。されば代々のけんわうちしんも、此ところにだんちやうをしむ。いはんやまつだいといふとも、いかでかわが山にきずをつくべき。心うしと申ほどこそあれ、まんさんの

大しゆ、のこりとゞまるものなくひがしさかもとへおりくんだり、十ぜんじの御まへにてせんぎしけるは、そもくあはづのほとりにゆきむかつて、くはんじゆをうばひとゞむべきなり。たゞしわれらさんわう大しの御ちからのほか又たのむかたなし。まことにべちのしさいなく、うばひとゞめたてまつるべくは、われらに一ツのずいさうを見せしめ給へと、をのくかんたんをくだきねんしけり。

こゝにむどうじのほつしの中に、じうゑんりつしがわらはに、つる丸とて十八さいになりしが、しんしむくるしみ、五たいにあせをながして、にはかにくるひいでたり。われに十ぜんじごんげんのりみさせ給へり。まつだいといふとも、いかでかわが山のくはんじゆを、たこくへはうつさるべき。しやうくせゝに心うし。さらんにとつては、われ此ふもとにあとをとゞめても、なにかせんとて、さうがんなみだをはらくとながす。大しゆ大きにあやしみて、まことに十ぜんじの御たくせんにてましまさば、われらにしろしを見せ給ひてもとのぬしへ返し給へとて、しかるべきらうそうどもす百人めんくにもちたるねんじゆを、十ぜんじの大ゆかの上へぞなげあげける。かのものぐるひはしりまはり、ひろひあつめてすこしもたがはず、いちくにもとのぬしにぞくばりける。大しゆしんめいれいげんのあらたなる事のたつとさに、みなずいきのなみだをぞながしける。そのぎならばゆきむかつてくはんじゆをうばひたてまつれやといふほどこそあれ、うんかのごとくはつかうす。あるひはしがからさきのはまぢにあゆみつゞきける大しゆもあり。あるひは山だやばせの(こ)じやうにふねをしいだすしゆとも



こうれう―興隆。

しうらん―照覧。

あり。思ひ／＼こゝろ／＼にむかひければ、きびしかりつるりやうそうし、ぎすをばこくぶんじにすてをきたてまつりわれさきにとにげさりぬ。大しゆこくぶんじへまいりむかふ。ぎす大におどろき給ひて、ちよくかんのものは、月日のひかりだにもあたらずとこそうけ給われ。いかにいはんや、じこくをめぐらさずいそぎをひいだすべしと、めんぜんのむねなるうへ、ざんじもなすらふべからず。しゆととく／＼かへりのぼり給へとて、はしちかふいでゝの給ひけるは、三だいくはいものいゑをいでゝ、しめいゆうけいのまどにいりしよりこのかた、ひろくゑんじうのけうぼふをがくし、けんみつのりやうしうをつたへて、わが山のこうれうのみおもへり。またこくかをいのりたてまつる事もおろかならず。しゆとをはこくむ心ざしふかゝりき。りやうしよ三しやうさんわう七しや、さだめてしうらんし給ふらん。身にあやまる事なし。むじつのつみによて、をんるのちうくはをかふむるせんぜのしゆくぐうなれば、よをも人をも神をも佛をもうらみたてまつる事なし。これまでとぶらひきたり給ふしゆとのほうしこそ、申つくしがたけれど、かうぞめのそでをぞしぼられける。大しゆもみなそでぞぬらしける。さて御こしをさしよせて、とく／＼と申せば、むかしこそ三千くはんじゆたりしが、いまはかゝるゝにんの身となりて、いかでかやんごとなきしゆがくしやたちにかきさゝげられてはのぼるべき。たとへのぼるべきにてありとも、わらんづなどいふものをはひて、おなじやうにあゆみつゞきてこそそのぼらめとてのり給はず。

こゝにさいたふのほつし、かいじやうばうあじやりゆうけいといふあくそうあり。たけ七しや

くばかりありけるが、くろかはおどしのよろひの、大あらめなるを、くさずりながにきなし、かぶとをばぬぎて、しらえのなぎなたわきばさみ、ひらかれ候へとて、大しゆのなかををしわけく、せんぎすの御まへにつんとまいり、大のまなこにて、しばしにらまへて申けるは、あつばれふかくのおほせどもかな。その御心にてこそ、かゝる御めにもあはせ給へ。とくくめされ候へと申ければ、せんぎすあまりのおそろしさにやいそぎのり給ふ。大しゆとりえたてまつるうれしさに、いやしきほうしわらはにはあらねども、しゆがくしやたちおめきさげんでかきさゝげのぼりけるに、人はかはれどもゆうけいはかはらず、まへごしかひて、こしのながえもなぎなたのえも、くだけよととるまゝに、さしもさかしきひがしさかもとをへいちをあゆぶがごとくなり。大かうだうのにはにこしかきすゑて、大しゆせんぎしけるは、そもくちよくかんをかうぶりて、るざいせられ給ふ人をとりかへしたてまつり、わが山のくはんじゆにもちひ申さん事、いかゞあるべしといひければ、かいじやうばうのあじやり、さきのごとくにすみいで、それたうざんは日ぼんぶさうのれいち、ちんごこくかのだうぢやうあり。さんわうの御あくはうさかんにして、ぶつぼううわうほうごかくなり。さればしゆとのみしゆにいたるまで、ならびなし。いやしきほうしばらまでも、よもつてかろんせず、いはんやちゑかうきにして、三千のくはんじゆたり。とくぎやうおもくして一山のくはしやうたり。つみなくしてつみをかうぶる事、これさん上らく中のいきどをり、こうぶく、をんじやうのあざけりにあらずや。此ときけんみつのあるじをうしなつて、しゆがくのがくりよ、けいせつのつとめおこたら

ん事、心うかるべし。こんどゆうけいちやうほんにせうぜられ、いかなるきんごくるさいもせられ、かうべをはねられん事、こんじやうのめんぼく、めいどのおもひでたるべしとて、さうがんにのみだをはら／＼とながす。大しゆみなもつ／＼とぞ同じける。それよりしてこそ、ゆうけいをばいかめばうとはいはれけれ。せんざすは、とうたうのみなみだに、めうくはうばうへをきたてまつりけり。

#### 一ぎやうあじやりのさた

ときのわうさいは、ごんげの人ものがれ給はざりけるにや、むかし大たうの一ぎやうあじやりは、げんそうくはうていの御ちそうにてまし／＼けるが、大こくもせうこくも、人のくちのさがなさは、きさきやうきひになをたて給ふ。あとかたなき事なれども、そのうたがひによて、くはらくへながされ給ふ。くだんの國には三のみちあり。りんぢだうとて御かうのみち、ゆうちだうとてぎう人のかよふみち、あんけつだうとて、ぢうくはのものをつかはすみちなり。此あんけつだうと申は、七日七夜、月日のひかりを見ずしてゆくところなり。しかれば一ぎやうはぢうくはの人とて、くだんのあんけつだうへつかはさる。みやう／＼として人もなく、ぎやうぶにせんどまよひ、しん／＼として山ふかし。たゞかんこくにとりの一こゑばかりにて、こけのぬれぎぬほしあへず。むじつのつみによつて、をんるのぢうくはをかうぶる事を、天だうあはれみ給ひて、九ようのかたちをげんじつ、一ぎやうあじやりをまばり給ふ。ときに一

ぎやうみぎのゆびをくひきりて、ひだんのそでに九ようのかたちをうつされけり。わかんりやうてうにしんごんのほんぞんたる九ようのまんだらこれなり。

たゞのくらんどかへりちう

せんざすを大しゆとりとゞめたてまつるよし、ほうわうきこしめして、やすからずおぼしめされける。さいくほうしうしけるは、むかしよりさんもんの大しゆ、みだりがはしきうつたえをつかまつる事は、いまにはじめずと申せども、これほどの事はうけ給りをよばず。もつてのほかにくはぶんに候。これを御いましめなくば、よはよにては候まじ。よく／＼御いましめ候へとぞ申ける。わが身のたゞいまほろびんずる事をもかへりみず、さんわう大しのしんりよにもはゞからず、ざんしんくにをみだすとはかやうの事をや申らん。大しゆわうちにはらまれて、さのみぜうめをたいかんせむもそれなりとて、ない／＼ゐんぜんにしたがひたてまつるしゆともありときこえしかば、せんざすめうくはうばうにまし／＼けるが、つゐにいかなるめにやあはんずらんと、心ほそふぞおぼしめしける。されどもるざいはなだめられ給ひけるとかや。しん大なごんなりちかのきやうは、さんもんのさうどうにより、わたくしのしゆくみをばをさへられけり。ひごろのないぎしたくはさま／＼なりしかども、ぎせいばかりにてさせる事しいだすべしとおおぼえざりければ、むねとたのまれけるたゞのくらんどゆきつな、此事むやくなりとおもふ心ぞつきにける。なりちかのきやうのかたより、ゆみぶくろのれうにとてをく

られたるしろぬのども、いゑのこらうどうがひたゝれ、こばかまにたちきせてゐたりけるが、  
つら／＼平家のはんじやうを見るに、たやすくかたぶけがたし。よしなき事にくみしてんげ  
り。もし此事もれぬるものならば、ゆきつなまづうしなはれなんす。たにんのくちよりもれぬ  
さきにかへりちうして、いのちいきんとおもふ心ぞつきにける。

五月廿五日の夜ふけ、人しづまつて、にう道しやうこくのしゆく所、にし八でうへ、たゞのく  
らんどゆきむかつて、ゆきつなこそ申入べき事候てまいりて候へと、申いれたりければ、なに  
事ぞ、きけとて、しゆめのはんぐはんもり國をいだされたり。ゆきつな、まつたく人してかな  
ふまじきにこそと申あひだ、にふだう中もんのらうにいでたいめんなり、こよひははるかにふ  
けぬらんに、たゞいまなに事にまいりたるぞとの給ば、さん候、ひるは人めしげふ候ほどに、  
夜にまぎれてまいり候。しんだなごんなりちかのきやう、そのほかめん中の人々、此ほどひや  
う具をとゝのへ、ぐんびやうをあつめられし事きこしめされ候や、にうだう、いさそれはさん  
もんのしゆとせめらるべしとこそきけと、こともなげにの給へば、ゆきつなちかふぬよりて、  
さは候はず、御一けをほろぼしたてまつらんずるけつこうとこそうけ給り候へと申せば、さて  
それはほうわうもしろしめされたるか。しさいにやをよび候。大なごんのぐんびやうをもよほ  
されし事も、めんぜんとてこそもよをされ候しか。しゆんくはんがと申て、さいくはうがかう  
申て、とありのまゝにさしすぎ／＼いち／＼に申せば、入道大をもつて、さぶらひどもよ  
びのゝしり給ふ、きくもまことにおびたゞし。ゆきつなよしなき事申しだして、たゞいましう

にんにやひきいだされんずらんとおもひければ、大野にひをはなちたる心ちして、いそぎもんぐわいへぞにげいづる。にう道、ちくごのかみさだよしをめして、やゝさだよし、京中にむほんものみちゝたり。一かうたうけの身の上にてあんなるぞ。一もんの人々よびあつめよ、さぶらひどもめせとの給へば、はせまはつてひろうす。はせあつまる人々には、う大しやうむねもり、三ゐの中將とも盛、さまのかみゆきもりいげの人々、かつちうゆみやをたいしてはせあつまる。夜中ににし八でうには、つはもの六七千きもやあらんとぞ見えし。あくれば六月一日、いまだくらかりけるに、にうだう、けんびいしあべのすけなりをめして、やゝすけなり、御しよへまいりて、大ぜんの大夫のぶなりよびいだして申さんずるやうは、此ころちかふめしつかひ候人々、あまりにてうおんにほこり、あまつさへよをみださんとのけつかうどもにて候なるを、たづねさたつかまつり候はん事をば、君もしろしめされまじふ候と申せとの給ひければ、すけなり御所へまいりて、大ぜんの大夫をよび出して、このやうを申けり。のぶなりいろをうしなひ、御ぜんへまいりて、此よしをそうしければ、ほうわうは、はや御心をあつて、あつぱれこれらがなゝはかりし事の、もれけるよとぞおぼしめされける。こはなに事ぞとばかり仰られて、ぶんみやうの御返じもなかりけり。すけなりややひさしふまちまいらせけれども、そのゝちはさして仰いださるゝむねもなかりければ、すけなりはしりかへりて、かうゝと申せば、にう道しやうこく、さればこそ君もしろしめされたり。ゆきつな此事つげしらせずば、にうだうあんおんにあるべしやとて、ちくごのかみさだよし、ひだのかみかげいをめし

て、からめとるべきものをげぢせられければ、二百き、三百き、をしよせ／＼からめとる。まづざうしきをもつて、中のみかどのしんだなごんなりちかのもとへ、きつと申あはすべき事あり。たちいり給へといひつかはしたりければ、大言、あつばれこれはさんもののしゆとせめらるべき事、申ゆるさんためにこそ、ほうわう御いきどをりふかければ、いかにもかなふまじきものをとて、わが身の上とは露ほどもしらず、うちきよげなるほういをたをやかにきなしで、八ようのくるまのあざやかなるにのり、さぶらひ四五人めし具し、ざつしき、とねり、うしかひにいたるまで、つねのしゆつしよりもひきつくろひてぞいでられる。そも／＼さいごとはのちにぞおもひあはせける。にし八でうちかふなつて、つはもの共あまたまち／＼にみち／＼たり。あなおびたゞし。こはなに事やらんと、くるまよりおり、もんをさし入見給へば、うちにもつはものどもひとなみぬたり。中もんのほかにおそろしげなるものどもが、二人たちむかひ、大なごんのさうのをひつぱり、たぶさとつてひきふせたてまつる。いましむべうや候らんと申ければ、にう道、あるべうもなしとの給ふ。とつてひきおこしたてまつり、一まなる所にをしこめて、つはものこれをしゆごしたり。大なごんゆめの心ちして、つや／＼ものもおぼえ給はず。ともにありつるさぶらひども、さんぐ／＼になり、ざうしきうしかひも、うしくるまをすてゝにげうせぬ。さるほどにほつしうじしゆぎやうししゆんくはんそうづ、平はんぐはんやすより、とらへていできたる。

さいくはうほつしも此事をきゐて、ぬんの御所ほうでうじ殿へむちをあげてはせまいる。平家

のさぶらひども、みちにてゆきあひ、にし八でう殿へきつとまいらるべし、たづねきこしめすべき事あるぞといひければ、これもほうぢうじどのへそうすべき事ありてまいるなりとて、とをらんとしけるを、にくいやつかな、さなはいせそとて、むまよりとつてひきおとし、ちうにくゝつて、にし八でうにまいり、つばのうちにひきすゑたり。にう道いかつて、しやこゝへひきよせよとて、ゑんのきはへひきよせさせ、てんせいをのれらがやうなる下らうのはてを君のめしつかはせ給ひて、なさるまじきくはんしよくをなし、ふしどもにくはぶんのふるまひして、あやまたぬ天だいざすをるざいに申おこなふ、あまさへ入道をかたぶけんとす。やつばらがなれるすがたよ。ありのまゝに申せとぞの給ひける。

さいくはうもとよりかうのものなれば、ちともいろもへんぜず、わるびれたるけしきもなく、おなをりて申けるは、さもさうずとよ。おん中にめしつかはるゝ身なれば、しつじべつたうしん大な言のおんぜんとてもよをされし事にくみせずとは申まじ。それはくみしたり。たゞしみゝにとまる事の給ふ物かな。たにんの事をばしらず、さいくはうがまへにて、くはぶんの事をばえこそいはれまじけれ。見ざりし事かとよ。御へんはぎやうぶきやうのちやくしにてありしかども、十四五まではしゆつしもせず、こ中のみかどのいゑなりのきやうのへんにたちよりしを、京わらんべがたか平太とこそわらひしか。そのゝちほうげんのころかとよ、たゞもりのあそんびぜんより上らくのとき、かいぞくのちやうほん三十よ人、からめまいらせられしくんこののしやうに、御へんは十八か九かにて四あして、ひやうゑのすけと申せしをだに、くはぶん



とこそときの人申あはせられしか。てん上のまじはりをだにきらはれし人のしその、大じやう大じんまでなりあがりたるやくわぶんなるらん。さぶらひほどのものゝ、じゆりやうけんびいしになる事、せんれいばうれいなきにあらず。などあながちにくはぶんなるべきと、はゞかるところなく申ければ、にう道あまりにいかつて、そののちはものもの給はず、しやつがくびさうなふきるべからず、よくゝいましめよとぞの給ひける。あしてをはさみさまぐゝにいましめとふ。さいくはうもとよりちんじ申さぬ上、きうもんはきびしく、のこりなふこそ申けれ。はくじやう四五まいにしろさせ、やがてくちをぞさかれける。つゐに五でうにしのしゆじやくにてぞきられける。そのこもろたか、おはりのいどだへながされたりけるを、うちてをつかはしてちうせらる。おとゝこんどうはんぐはんもろつねごくちやうせられたりしをめしいだされ、かうべをはねられ、そのおとゝもろひらどもにきられ、らうどう二人、おなじくかうべをはねられけり。天だいざするざいに申おこない、十日のうちにさんわう大しのしんばちみやうばちをたちまちにかうぶつて、あとかたもなくほろびけるこそあさましけれ。

しん大なこん、一まなる所にをしこめられ、これはひごろのあらまし事のもれきこえたるにこそ、たれもらしけん。さだめてほくめんのうちにこそあるらんと、おもはん事なふあんじつ々けておはしけるところに、うちのかたより、あしをとたからかにふみならしつゝ、大なこんのうしろのしやうじを、さつとあけられたり。入道しやうこくもつてのほかにいかれるきしよくにて、そけんのころもの、みじかやかなるに、しろき大くちふみくゝみ、ひじりづかのかたな

まへだれにさしはらし、しばらくにらまへてたゞれたり。やゝありて、さても御へんをば平治のみだれるとき、すでにちうせらるべかりしを、だいふがやうく申て、御へんのくびをばつぎたてまつり候ぞかし。それになんのいこんあれば、此一もんほろぼすべき御けつかうはさふらひけるぞ。され共たうけのうんつきぬによりて、これまでむかへたてまつる。ひごろのけつこうのしだい、たゞいまちきにうけ給り候はんとの給へば、大な言、まつたくさる事候はず。人のざんげんにてぞ候らん。よくく御たづねあるべう候とぞ申されける。にう道いはせもはず、人やあるとめされけり。ちくごのかみまいりたり。さいくはうがくじやうもつてまいれとの給へば、やがてもちてまある。をし返しく二三べんよみきかせて、あらにくや、此上はさればなにとちんずるぞとて、大な言のかほにさつとなげかけ、しやうじをはたとたてゝぞいでられける。入道なをもはらをすえかね給ひて、つねとを、かねやすとめされければ、なんばの次郎、せのをの太郎まいりたり。あのおとことつて、にはへひきおろせとぞの給ひける。二人のもの共かしこまつて候ひけるが、こまつ殿の御きしよくいかゞあるべう候ひなんと申ければ、よし／＼さればなんぢらはだいふがめいをおもくして、入道がおほせをかるんずるござなれとの給へば、あしかりなんとやおもひけん、大なごんのもどりをとつて、にはへひきおろしたてまつる。とつてをさへて、いかやうにもころすべうや候と申せば、たゞおめかせよとぞの給ひける。二人のもの共みくちをあて、いかやうにも御こへをいだすべう候とさゝやきて、もとどりとつてをしふせたてまつる。二こゑ三こゑぞおめかれける。あるひはぐうのは

せうぎ―周儀。

しうか―蕭何。

しうじん―小人。

かりにかけ、あるひはじやうはりのかゞみにひきむけ、しやばせかいのざい人を、つみのきやうぢうによて、あばうらせつどもがかしやくすらんも、かくやとぞおぼえたる。たとへばしうはんとはられ、かんはうすしひしほにせらる。てうそりくをうく、せうぎつみせらる。しうか、はんくはい、かんしん、はうゑつ、これらはみなかんのかうそのちうしんなりしかども、しうじんのざんげんによて、くははいのはぢをうくといへり。大なごん、わが身のかくなるにつけても、しそくたんばのせう將いげ、いかなるめにかあわんと、くやまれけるぞいとをしき。さしもあつき六月にしやうぞくをだにもくつろげず、むねせきあぐる心ちして、一まなる所にをしこめられ、あせもなみだもあらそひながれつゝまし／＼けり。

### こけうくん

さるほどにこまつどの、ぜんあくにさはぎ給はぬ人にて、はるかにあつて、くるまにのり、ちやくしごんのすけせうしやうくるまのしりわにのせてまつり、ゑふ四五人、ずいじん三人めし具して、つはもの一人もぐし給はず、まことにおほやうげにてぞおはしける。くるまよりおり給ふところに、ちくごのかみさだよしつとまいり、などこれほどの御大事に、ぐんびやうをばめし具せられ候はんやと申ければ、こまつどの、大じとは天がの大事をこそいへ、わたくしを大事といふやうやあるとの給へば、ひやうぢやうたいしたるもの共みなそゞろひきてぞ見えける。大なごんをばいづくにをかれたるやらんとて、かしここのしやうじをひきあけ／＼

見給へば、あるしやうじの上にくもでゆふたるところあり。こゝやらんとてあけられたれば、大なごんおはしけり。うつぶして、めも見あげ給はず、おとゞ、いかにやとの給へば、そのときめを見あげて、うれしげにおもはれたりしきしよく、ちごくにてぎい人が、ちぎうばさつを見たてまつるらんも、かくやとおぼえてあはれなり。大なごん、いかなる事にて候やらん、うきめにこそあひ候へ。さてわたらせ給へば、さりとともたのみまいらせ候。平治にもすでにうすべうさふらひしを、御おんをもつてくびをつぎ、くらゐ正二ぬくはん大なごんにいたつて、すでに四十にあまり候。御おんこそしやうくせゝにもはうじつくしがたふそんじ候へ。おなじくはこんどもかひなきいのちをたすけさせおはしませ。いのちだにいきて候はゞ、しゆつけ入道して、かうやこがはにとぢこもり一すぢにごせばだいのつとめをいとなみ候はんとの給へば、こまつ殿、人のざんげんにてぞさふらふらん。うしなひたてまつるまでの事は候まじ。たとひさも候へ、しげもりかくて候へば、御いのちにはかはりたてまつるべしとて出られけり。おとゞにう道しやうこの御まへにまいりて申されけるは、あの大なごんさうなふうしなはれ候はん事は、よくく御はからひ入べう候。せんぞしゆりの大夫あきすゑ、しら川のみんにめしつかはれしよりこのかた、いゑにそのれいなき正二ぬの大なごんにいたつて、たうじ君のぶさうの御いとをしみなり。さうなふかうべをはねられん事は、いかゞあるべう候はんや。都のほかへいだされたらんは、ことたりさふらひなん。かくは又きこしめすとも、もしそらごとにても候はゞ、ふびんの事に候。きた野の天神はしへいのおとゞのざんそうにより、うきなをさいかい

のなみにながし、にしの宮のおとゞは、たゞのまん中がざんげんによて、その身をせんやうのくもによす。これみなむじつなりしかども、るざいせられ候ひき。ゑんぎのせいだい、あんわのみかどの御ひが事とぞうけ給る。しやうこなをかくのごとし。いはんや、まつだいにをひてをや。けんわうなを御あやまりあり、いはんやぼん人にをひてをや。すでにめしをかれ候うへは、いそぎうしなはずとも、なんのくるしき事や候べき。つみのうたがひをばかろくせよ、ここのうたがひをばおもんぜよ、とこそ見えて候へ。しげもりかの大なごんがいもとにあひつれて候。これもり又大なごんがむこなり。かやうにしたしければ、申とやおぼしめされん。まつたくそのぎにて候はず。たゞよのため人のためをぞんちてかやうに申候なり。一とせほう元にこせうなごんにう道しんぜいがしつけんのとときにあひあたつて、さがの天わうの御う、うひやうへのじうふちはらのなかなりがちうせられてより此かた、しざいほど心うき事なしとて、君廿五代のあひだ、たえておこなはれざりしざいをしんぜいはじめておこなひ、うちのあくさふのしかばねをほりおこし、じつけんせし事どもをば、あまりなるまつりごとゝこそおぼえさふらひしか。さればいにしへの人にも、しざいをおこなはるれば、かいだいにむほんのともがたえずとこそ申つたへて候へ。そのことばにつきて、なか二年ありて平治にこといできて、しんぜいがいきながらうづもれしをほりいだし、かうべをはねられおほちをわたされて、保元に申おこなひし事のいくほどもなふて、身のうへにむくひ候にきとおもへば、おそろしふこそ候しか。これはさせるてうてきにもあらず。かたゞをほそれあるべし。御ゑいぐはのこるとこ

ろなければ、おぼしめす事あるまじけれども、しゝそんなはんじやうをこそあらまほしふ候へ。ふそのぜんあくは、かならずしそんにむくふと見えて候。しやくぜんのいゑにはよけいあり、しやくあくのかどにはよあうとゞまるとこそうけ給り候へ。かの大なごんこんやうしなはれ候はん事、しかるべうも候はずと申されたりければ、にう道げにもとやおもはれけん、しざいをばおもひとゞまり給ひけり。おとゞちうもんのらうにおはして、さぶらひどもにむかつて、おほせけるとて、なんぢらあの大なごんさうなふきる事あるべからず。にう道はらのたちのまゝ、ひが事しいだしてかならずくやみ給ふべし。ものさはがしき事しいだして、しげもりうらむなどの給へば、ぶしども、したをふりてをそれおのゝきあへり。さてもけさつねとを、かねやすが大なごんになさけなふあたりける事、かへすゝもきくはいなり。しげもりがかへりきかんところをなどかはゞからざらん。かたいなかのものどもはいつもかくあるぞとの給へば、なんばの次郎、せのをの太郎も、ふかくをそれいたりけり。おとゞはかくげぢして、こまつどのへぞかへられける。

平さいしやうせうしやうこひうくる事

大なごんのさぶらひども、中のみかどからす丸のしゆく所へはしりかへり、此よしいちゝに申せば、きたのかたいげの女ばうたちも、おめきさけび給ひけり。せうしやうどのをはじめまいらせて、きんだちもとられさせ給ふべしとこそうけたまはり候へ。かみをばゆふさりうしな

ひまいらすべしと候。これへもついぶくのぶしどもが、まいりむかひさぶらふなるに、いづちへもしのばせ給はではと申せば、われのこりとゞまる身として、あんおんにてはなにかはせん。たゞおなじ一夜の露ともきえむこそほゐなれ。さてもけさをかぎりとおもはざりけるかなしきよとて、ふしまろびてぞなき給ふ。すでについてぶくのぶしどものちかづくよしを申ければ、さればとて、こゝにて又はちがましきめを見んもさすがなりとて、十になり給ふひめ君、八になり給ふわか君、くるまにとりのり給ひて、いづくともなくやりいだす。中のみかどをにしへ、大宮をのぼりにきた山のほとり、うんりんめんへぞいれまいらせける。そのほとりなるそうばうにおろしをきたてまつり、御とものもの共も、身のすてがたさに、たれに申つけをきたてまつるともなく、いとま申て、ちりぐゝになりにけり。いまはおさなき人々ばかりのこりとゞまつて、又こととふ人もなくてぞおはしけるきたのかたの心のうち、をしはかられてあはれなり。くれゆくかけを見給ふにつけても、大なごんの露のいのち、このくれをかざりと、おもひやるにもきえぬべし。いくらもありつる女ばうさぶらひども、よにをそれかちはだしにてまどひいづ。もんをだにもをしだてず、むまどもはむまやにたてならびたちたれども、くさかふものも見えず。夜あくればむまくるまもんにたてならべ、ひんかくぎにつらなり、あそびたはぶれまひおどり、よをよともおもひ給はずこそきのふまではありしに、夜のまにかはるありさまは、せいじやひつめつのことはりは、めのまへにこそあらはれけれ。たのしみつきてかなしみきたると、がうしやうこうのふでのあと、おもひしられてあはれなり。

たんばのせうしやうは、あんの御所ほうちうじどのに上ぶしして、いまだいでられざりけるに、大な言のさぶらひども、いそぎほうちうじどのへまいりて、せう將をよびいだしたてまつり、かみはにし八でうにけさすでにをしこめられさせ給ひぬ。きんだちもみなとらはれさせ給ふべしとこそうけ給はり候へと申せば、せうしやう、などさらばそれほどの事をばさいしやうのもとよりはつげざるやらんと、の給ひもはてぬに、つかひあり。なに事にて候やらん。にし八でうよりきつとぐしたてまつれとさふらふ。いそぎいでさせ給へと申ければ、せうしやうやがて心えて、あんのきんじゆの女ばうたちよびいだしたてまつり、などやらんよの中ゆふべより、物さはがしうさふらひしを、いつもの山ほううしのくだるかなんどよそにおもひて候へば、はやなりつねが身の上にて候なり。大なごんゆふさりうしなはれ候はんなれば、なりつねもどうざいにてこそ候はんずらめ。八さいのときより御所へまいりはじめ、十二よりあさゆふりうがんにちかづきまいらせて、てうおんにのみあきみちてこそさふらひつるに、いまいかなるめにあふべく候やらん。いま御所へもまいり、君をも見まいらせたふ候へども、かゝる身にまかり成て候へば、はゞかりをぞんずるなりとぞ申されける。ねうばうたち、いそぎ御ぜんへまいり、此よしをそうせらる。さればこそけさにう道がつかひにはや心えつ。これらがないくはかりし事のあらはれぬるにこそ。さるにてもなりつねこれへと御きしよくありければ、よはおそろしけれども、まいられたり。ほうわう御らんじて御なみだにむせばせおはします。上よりおほせいでらるゝむねもなし。せうしやうなみだにかきくれて、御ぜんをまかりいづ。ほうわ



ううしろをはるかに御らんじをくらせ給ひて、たゞすゑのよこそ心うけれど、これがかぎりにて御らんぜられぬ事もやあらんずらむとて、御なみだをながさせ給ふぞかたじけなき。せう將御所をまかりいでられけるに、おん中の人々、せう將のたもとをひかへ、そでをひき、なみだをながさぬはなかりけり。

せう將はしうとのさいしやうのもとへいでられたれば、きたのかたちかふさんすべき人にておはしけるが、けさより此なげきうちそへて、すでにいのちもきえ入心ちぞせられける。せうしやう御しよをまかりいでられけるより、ながるゝなみだつきせぬに、此きたのかたのありさまを見給ひては、いとゞせんかたなげにぞ見えられける。せうしやうのめのとに六でうといふ女ばうあり。せうしやうのそでをとり、御うぶやのうちよりまいりはじめ、君をそだてまいらせて、わがみのとしゆくをもしらず、こぞよりことはおとなしくならせ給ふ事をのみうれしとおもひまいらせて、すでに廿一年なり。あからさまにもはなれまいらせず。おんないへまいらせ給ひて、をそくいでさせ給ふだにも、心もとなふおもひまいらせつるにとて、なきければ、せうしやう、いたふななげきそ。さいしやうどのゝさておはしければ、いのちばかりはなどか申うけられざらんと、こしらへなぐさめ給へども、六でう人めもしらず、なきもだへけり。

さるほどこにし八でうより、せうしやうをそしといふつかひしきなみのごとし。さいしやう、ともかくもゆきむかふてこそとていでられけり。せう將をもおなじくるまにのせてぞいで給ふ。しゆく所には女ばうたち、なき人などをとりいだす心ちして、みななきふし給ひけり、保元

平治よりこのかた、たのしみさかへはありしかども、うきなげきはなかりしに、このさいしやうばかりこそ、よしなきむこゆゑに、かゝるなげきはせられけれ。にし八でうちかふなりければ、さいしやうくるまをとめて、まづあんないを申しられければ、にう道、せうしやうはこのうちへはかなふまじとの給ふあひだ、そのへんちかきさぶらひのしゆく所におろしたてまつり、つはもの共しゆごしけり。さいしやうにははなれ給ひぬ、せうしやうの心のうちこそかなしけれ。さいしやう、ちうもんにましゝて、にう道しやうこくにげんざんにいらんとし給へ共、入道しやうこく、いでもあはず、げん大夫はんぐわんすゑさだをもつて申されけるは、よしなきものにしたしふなり候て、かへすゝもくやくし候へども、いまはかひも候はず。そのうへあひ具して候もの、ちかふさんすべきとやらんうけ給しが、このほど又なやむ事候なるに、此なげきをけさよりうちそへて、身みともならぬさきにいのちもたえ候なんす。しかるべく候はゞ、なりつねをのりもりにしばらくあづけさせおはしませ。なじかはひが事をばさせ候べきと申されければ、すゑさだ此やうをまいりて申。にう道、あつぱれこのれいのさいしやうが、ものに心ゑぬよとしてしばしは返じもなかりけり。さいしやうちうもんにて、いかにゝとまたれけり。やゝありてにう道の給ひけるは、ゆきつな此事つけしらせずば、にう道あんおんにえやはあるべき。たうけ又うせなんには、御へんとてもつゝがなふはおはせじ。此せうしやうというは、しん大なごんがちやくしなり。ものをなだむるもやうにこそよれ、えこそはゆるすまじけれとの給へば、すゑさだかへりまいりて申せば、さいしやうよにもほゐなげに

て、おほせのむねをかへし申事、そのをほそれすなからず候へども、保元平治よりこのかた、大小事に身をすてて御いのちにもかはりたてまつり、あらき風をもまづふせぎまいらせんとこそぞんじ候ひしか。このちもいかなる御大事も候へ、のりもりこそ年おひて候ども、こどもあまた候へば、一ばうのみかたにはなどかならずは候べき。それになりつねしばらくあづからんと申を、御ゆるされなきは、一かうのりもりを二こゝろあるものとおぼしめさるゝにこそ。身のいとまを給はつて、しゆつけにうだうをもし、かた山ざとにこもりてゐて、一すぢにごせばだいのつとめをいとなみ候はん。よしなきうき世のまじはりなり。世にあればこそそのぞみもあれ、のぞみかなはねばこそうらみもあれ。しかじうき世をいとひ、まことのみにいりなんにはとぞの給ひける。すゑさだにがくしき事かなとおもひて、此やうを又まいりて申。かどわきどのはおぼしめしきりたるげに候物をと申せば、入道大きにおどろき給ひて、しゆつけにう道こそけしからずおぼえ候へ。さらばなりつねをば御へんのしゆく所へしばらくをかれ候へと、しぶくゝにぞの給ひける。すへさだ此やうを又まいりて申。さいしやうよにもうれしげに、あはれ子をば人のもつまじき物かな。わが子のゑんにむすぶふれずんば、これほどのりもり心をばくだかじとてぞいでられける。せうしやうまちうけて、さてなにと候やらんと申されければ、さいしやう、さればにう道かなふまじきよしの給ひつるを、しゆつけ入道まで申たれば、しばらくしゆくしよにをきたてまつれとこそその給ひつれ。されどもしうはよかるべしともおぼえずとの給ひければ、せう將、されば御おんをもつてしばしのいはのはのび候ぬるに

こそ。さても大なごんの事はいかにときこしめされ候やらん。もしゆふさりうしなはれ候はんにをひては、なりつねもいのちいきてなにかせん。おなじ御おんにて候はゞたゞ一しよにていかにもならんやうを申させ給ふべきと申されければ、そのときさいしやうよにも心くるしげにて、それもこまつのだいふのとかう申されければ、しばらくのび給ふやうにこそうけ給り候へ。御心やすくおぼしめせとの給へば、せう將てをあはせてぞよろこばれける。こならざらんものは、たれかたゞいまわがみのうへをばさしをひて、これほどによるこぶべき。まことのちぎりはおやこの中にぞありける。されば子をば人のもつべかりける物かなどやがておもひかへされける。けさのやうに又どうしやしてこそかへられけれ。しゆくしよには女ばうたち、しゝたる人のたゞいまいきかへりたる心ちして、みなよろこびのなみだをぞながしあはれける。此かわきのさいしやうと申は、入道のしゆく所ちかくかどわきといふところにましゝければ、かどわきどのとぞ申ける。

### 大けうくん

にう道しやうこく、かやうに人々あまたいましめをかれても、なをもやすからずやおもはれけん、せんとをうらみたてまつらばやとぞ申されける。すでにあかちのにしきのひたゝれに、しろかなものうちたる、くろいとおどしのはらまき、むないたせめてき給ふ。せんねんあきのかみたりしとき、いつくしまの大みやう神より、れいむをかうぶりて、うつゝに給はられたる

ひぎうのてばこの、しろがねにてひるまきしたるこなぎなた、つねにまくらをはなたずたてられたるをわきにはさみ、中もんのらうにこそいでられけれ。そのきしよくまことにあたりをはらつて、ゆゝしふぞ見えける。ちくごのかみさだよしをめす。さだよしもくらんちのひたゝれにひおどしのよろひきて、御ぜんにかしこまつてぞ候ひける。やゝさだよし、此事いかゞおもふ。一とせ保元に平うまのすけたゞまさはじめて、一もんなかばすぎて、しんめんのみかたへまいりにき。中にも一の宮の御事は、こぎやうぶきやうのやうくんにてわたらせ給ひしかば、かたゞ見はなちまいらせがたかりしかども、こめんの御ゆいかにまかせたてまつりて、みかたにてさきをかけたりき。これ一つのほうこうなり。つぎに平治のみだれのとき、のぶよりよしともだいにたてこもり、天がくらやみとなりしを、いのちをすてをひおとし、つねむねこれかたをめしめしめしよりこのかた、君の御ために身をおしまざる事すてにどゞにをよぶ。たとひ人いかに申とも、此一もんをば、いかでかすてさせ給ふべき。それになりちかといふむゆうのいたづらもの、さいくはうといふ下せんのかたうじんが申事につかせ給ひて、此一もんほうぼすべきよし、ほうわうのごけつこうこそいこんのしだいなれ。このゝちもざんそうする物あらば、たうけついはつのみんぜんくだされんとおぼゆるぞ。てうてきとなりなんのちは、いかにくゆるともゑきあるまじ。さらば世をしづめんほど、ほうわうをこれへ御かうをなしまいらするか、しからずば、とばのきたどのへうつしたてまつらんとおもふはいかに。そのぎならば、ほくめんのもの共の中に、さだめてやをも一ツいんずらん。さぶらひどもにそのようい

せよとふるゝべし。大かたはにう道あんかたのほうこうにをひてははやおもひきつたり。むまにくらをけ。きせながとりいだせとぞの給ひける。

しめのはんぐわんもりに、こまつ殿へはせさんじ、なみだをながせば、おとゞ、いかにや大なごんきられぬるかとの給へば、さは候はず、御あんざんあるべしとて、かみすでにきせながをめされて候。さぶらひどもみなうちたつてほふちうじどのへとて、たゞいまよせられ候。ほうわうをもとぼのきたどのへ御かうとはきこえ候へども、ないゝはちんぜいのかたへうつしたてまつるべしとこそうけ給り候へと申せば、こまつ殿、いかでかさる事あるべきとはおもはれけれ共、けさのにうだうのきしよくはさも物くるはしき事もやますらんとて、いそぎくるまにのり、にし八でうへぞおはしける。もんのうちへさし入て見給へば、にう道すではらまきをき給へるうへ、一もんのけいしやううんかくす十人、おもひゝのひたゝれ、いろゝのよろひきて、中もんのらうに二ぎやうにちやくざせられたり。そのほかしよこくのじゆりやうゑふしよしは、ゑんにみこぼれ、にはにもひしとなみゐたり。はたぎほをひきそばめゝ、むまのはるびをかため、かぶどのををしめて、たゞいますでにみなうちたゝれんずるきしよくともなるに、こまつ殿はゑぼしなをしに、大もんのさしぬきのそばをとり、しづかにいり給ふ、ことのほかにぞ見えられける。大じやう入道は、とをくより見給ひて、れいのだいふが世をひうするやうにふるまふ物かな。ちんぜばやとおもはれけれども、子ながらもうちにはすでに五かいをたち、じひをさきとし、ほかに五じやうをみだらず、れいぎをたゞしふし給ふ人

なれば、あのすがたにはらまきをきてむかはん事、さすがおもはゆくはづかしふやおもはれけん、しやうじをすこしひきたてゝ、そけんのころもをはらまきの上にき給ひたりけるが、むないたのかな物すこしはづれて見えけるをかくさんと、しきりにころものむねをひきちがへくぞし給ひける。こまつ殿はおとくのう大しやうむねもりのざじやうにつき給ふ。しやうこくもの給ふ事もなく、おとくも申しださるゝむねもなし。やゝあつて入道の給ひけるは、やゝなりちかのむほんは、ことのかずにもあらざりけり。これはたゞ一かうほうわうの御けつこうにて候ひけるぞ。されば世をしづめんほど、ほうわうをとぼのきたどのへ御かうなしたてまつらばや。しからずば御かうをこれへなりともなしまいらせんとおもふはいかに、との給へば、こまつ殿、きゝもあえ給はず、はらゝとぞなかれける。にう道、いかにゝとあきれ給ふ。やゝありておとくなみだををしのごひて、申されけるは、此おほせをうけ給はり候に、御うんははやすゑになりぬとおぼえ候。人のうんめいのかたぶかんとては、かならずあくじをおもひたち候なり。かたゞ御ありさまを見たてまつるに、さらにうつつともおぼえ候はず。さすがわがてうはぞくさんへんちとは申ながら、天しう大神の御しそん、くにあるじとして、あまつこやねのみことの御すゑ、てうのまつりごとをつかさどり給ひてよりこのかた、大じやう大じんのくはんにいたるほどの人の、かつちうをよろひましまさん事れいぎにそむくにあらずや。なかんづくしゆつけの御身なり。それ三ぜのしよぶつげだつどうさうのほうゑをぬぎすてゝ、たちまちにかつちうをき給はん事、うちにははかいむざんのつみをまねき、ほかには又じんぎ

れいちしんのはうにもそむき候なんず。かたぐをそれある申事にて候へども、世にまづ四おん候。天ちのおん、こくわうのおん、ふものおん、しゆじやうのおんこれなり。これをしれるをもつてじんりんとす。されどもその中にもつともおもきはてうおんなり。ふてんのしたわうどにあらざといふ事なし。さればいせんの水にみゝをあらひ、しゆやうざんにわらびをおりしけんじんも、ちよくめいをばそむかず、れいぎをばぞんちすところうけたまはれ。いはんやせんぞにもいまだきかざりし大じやう大じんをきはめ給ふ。いはゆるしげもりがむぎいぐあんの身をもつて、れんぶくわいものくらみにいたる。しかのみならずこくぐんなかば一ものしよりやうとなり、でんゑんことぐく一けのしんじたり。これきだいのてうおんにあらずや。いまこれらのばくだいの御おんをおぼしめしわすれ給ひて、みだりがはしく君をかたぶけまいらせ給はん事、天しう太神正八まんぐうのしんりよにもそむきなんず。日ぼんはこれしんこくなり。しんはひれいをうけ給はず。しかれば君のおぼしめしたところ、だうりなかばなきにあらず。中にも此一もんは、だいぐてうてきをたひらげて、四かいのぎやくらうをしづむる事はぶさうのちうなれども、そのしやうにほこる事、ばうじやくぶじんとも申つべし。さればしやうとくたいしの十七かでの御けんばうにも、人みな心あり。心をくおもむきあり、かれをぜとしわれをひとし、われをぜとしかれをひとす。ぜひのことはりたれかよくさだむべき。あひともにけんぐなり。たまぎのはしなきがごとし。これをもつてたとひ人いかにといふとも、かへりてわれとがををそれよとこそ見えて候へ。しかれども御うんいまだつきせざ



るにて、此事すであらはれ候ぬ。そのうへ大なごんをめしをかれ候うへは、たとひ君いかなる事をおぼしめしたつとも、なにのをそれか候べき。その上しよたうのざいくはをおこなはれ候うへは、いまはしりぞひて事のよしを申させ給はゞ、君の御ためにはいよくほうこうのちうきんをつくし、たみのためにはますくぶいくのあいれんをいたさしめ給はゞ、しんめいのかごにもあづかり、ぶつだのみやうりよにそむくべからず、しんめいぶつだ、かんおうあらば、君もおぼしめしなをす事などか候はざるべき。君としんとをくらぶるに、君につきたてまつるはちうしんのはうなり。だうりとひが事をならぶるに、いかでかだうりにつかざるべき。これは君の御ことばりにて候へば、かなはざらんまでも、しげもりはみん中にまいりてしゆごしたてまつらばやとこそぞむじ候へ。そのゆへは、しげもりじよしやくよりいま大じんの大しやうにいたるまで、しかしながらてうおんにあらずといふ事なし。そのおんのおもき事をおもへば、せんくはばんくはのたまにもこえ、そのとくのふかきいろをあんずれば、一じうさいじうのくれなみにもすぎたるらんとこそおぼえ候へ。しかればみん申へさんじてほうわうをしゆごしたてまつらんとぞんち候。いのちにかはらんとちぎりて候さぶらひども、一二千人も候らん。かれらをあひ具して、ふせぎたてまつらんには、もつてのほかの大事にてこそ候はんずらめ。かなしきかな、君の御ためにほうこうのちうをいたさんとすれば、めいりよ八まんのいたゞきよりもなほたかきおやのおんたちまちにわすれんとす。いたましきかな、ふかうのつみをのがれんとすれば、君の御ためにすでにふちうのげきしんともなりぬべし。しんたいこゝ

しうか―齋何。

せんじう―先蹤。

ちうしよく―重職。

ちうくく―重疊。

にきはまれり。ぜひいかにもわきまへがたし。こゝにらうしの御ことばこそおもひしられて候へ。こうなりなとげて身しりぞけ、くらみをさげざるときんばそのがいにあふといへり。かのしうかは太こうかたへにこえたるにて、くはん大しやうこくにいたり、けんをたいしくつをはきながら、てん上へのぼる事をゆるされしかども、えいりよにそむき、かうそこにおもくいましめ給へり。かやうのせんじうをおもふにも、ふつきといひ、ゑいぐはといひ、てうおんといひ、ちうしよくといひ、御身にとつてはことゞくきはめ給ひぬれば、御うんのつきさせ給はん事、いまはかたかるべからず。ふつきのゑゑに、ろくめちうぐせり。ふたゝびみなる木は、そのねかならずいたむと見えて、心ぼそふこそ候へ。いつまでかいのちいきて、みだらん世をも見候べき。たゞすゑのよにしやうをうけて、かゝるうきめにあひ候しげもりがくははうのほどこそ、つたなう候へ。たゞいまもさぶらひ一人におほせつけて、御つぼのうちへめしんだされ、しげもりがかうべをはねられん事は、やすき御事にてこそ候はめ。そのゝちはともかくもおぼしめすまゝなるべしとて、なみだをながし給へば、なほしのそもしほるばかりなり。これを見てそのざになみめたる一もののけいしうんかくよりはじめて、みなそでをぞぬらされける。にう道、いやゝこれまではおもひもよらず。あくたうどもが申事につかせ給ひて、ひが事なんどもいでこんずらんとおもふばかりにてこそ候へとのたまへば、おとゞ、たとひひが事候とも、君をばなにとかしまいらせ給ふべきとて、つめたつて中もんにぞいでられける。さぶらひどもにの給ひけるは、いま申つる事をば、なんちううけ給はらずや、けさよりこ

れに候て、かやうの事ども申しづめんとおもひつれども、ひたさはぎに見えつれば、かへりつるなり。みんさんの御ともにをひては、しげもりがかうべをめされんを見てつかまつるべし。さらば人まいれとて、こまつ殿へぞかへられける。

その、ちしゆめのはんぐはんもりくにをめして、しげもりこそ天の大事をべつしてきゝいだしたれ。われをわれとおもはんものどもは、いそぎものゝぐしてまいるべし。此よしひろうせよとの給へば、しゆめのはんぐはんうけ給りはせまはりてひろうす。おぼろげにてはさはぎ給はぬ人の、かゝるふれのあるはべちしさいあるにこそとて、ものゝぐして、われもゝとはせまいる。よど、はづかし、うち、おかのや、ひの、くはんじゆじ、だいご、をぐるす、むめづ、かつら、おほはら、しづはら、せりうのさとにあふれみたるつはもの共、あるひはよろひきて、かぶとをきぬもあり、あるひはやをふてゆみをもたぬものもあり、かたあぶみふむやふまずに、あはてさはひでこまつ殿へはせまいる。にし八でうにすせんきありつるつはものども、こまつ殿にさはぎ事ありときこえければ、にうだうしやうこくにかうとも申さず、さゝめきつれて、こまつどのへぞまいりける。にし八でうにはあをねうばう、ふでとりなんどぞ候ひける。ゆみやにたづさはるほどのもの、一人ももるゝはなかりけり。にう道しやうこく大きにおどろき給ひて、ちくごのかみさだよしをめして、だいふがなにとおもふて、これらをみなよびとるやらん。これにていひつるやうに、じやうかいがもとへうちてなんどもやむけんずらんの給へば、人も人にこそより候へ。いかでかさる事候べき。の給ひつる事もいまはさだめて御こうく

はいぞ候らんと申せば、にうだう、いや／＼だいに中ちがふてはかなふまじとて、はらまきをぬぎをき、そけんのところもにけさうちかけ、ほうわうにむかひまいらせん事もはやおもひとゞまり、くるひさめたるけしきにて、いと心もおこらぬそらねんじゆしてこそおはしけれ。

こまつ殿には、しゆめのはんぐはんうけ給りて、ちやくたうつけけり。はせまいりたるせい、一まんよぎとぞしるしける。ちやくたうひけんのゝち、おとゞさぶらひどもにたいめんして、此ころなんちらがしげもりに申をきしことばのすゑちがはずして、かやうにまいりたるこそしんびうなれ。いこくにさる事あり。しうのようわうは、ほうじといふさいあいのきさきをもち給へり。たゞしようわうの心になはぬ事とは、ほうじゑみをふくまずとて、ゆうせうよりわらふ事なかりき。ようわうほみなひ事にしておはしけるに、そのくにのならひに、天がに事いでくるとき、ほうくはとて、みやこよりはじめてしよ／＼にひをあげ、たいこをうちて、つはものをめすはかりごとあり。そのころひやうかくおこつて、天がにはうくはをあぐ、きさきこれを見給ひて、あなふしぎや、さればひもあれほどかくあがりけるよとて、そのときはじめてゑみ給ふ。一たびゑめばもゝのこびあり。ようわううれしき事にして、此きさきはうくはをあいしたまへりとて、その事となくつねにはうくはをあげ給ふ。しよこききたるにあたもなければすなはちさりぬ。かやうにする事ゞにをよびければ、つはものはやはせまいらざるほどに、りんこくよりきうとおこつて、ようわうをうたんとするに、ほうくはあげ給へども、れいのきさきのひにならひて、まいるものもなかりけり。そのときみやこかたむゐて、ようわう

しんびうー神妙。

ようわうー幽王。

きうとー凶徒。

てきにとらはれぬ。かやうの事があるぞとよ。これよりめさんには、じこんいごたゞいまのごとくまいるべし。ふしぎの事をきゝいだしつるあひだめしたるなり。されどもきゝなほしつれば、かへれとて、みなかへされけり。まことはさせる事もきゝいだされざりけれども、いさゝかちゝをいさめ申されつることばにしたがひて、わがみにせいにつくか、つかぬかをもしり給ひぬべきためなり。いかでかちゝといくさをし給ふべきにはあらね共、にう道の心をもやはらげたてまつらんとのはかりごとゝぞおぼえたる。おとゞのぞんちのむね、君のためにはちうあり、ちゝのためにはかうあり。ぶんせんわうの給ひけるにたがはず。ほうわうもこれをきこしめして、いまにはじめぬ事なれども、だいふが心のうちこそはづかしけれ、あたをばおんをもつてほうぜられたりとぞおほせける。くはほうめでたふて、おとゞのだいしやうにこそいたらめ、ゆうぎたいはい人にすぐれ、さいちさいかくさへ世にこえたとぞ、ときの人かんぜられける。くにゝいさめるしんあれば、そのくにかならずやし、いゑにいさめるこあれば、そのいゑかならずたゞし共、かやう事をや申べき。

なりちかるざいせうしやうるざい

同六月二日、大なごんをば、くぎやうのざへいだししたてまつて、御物したてゝまいらせたれども、御らんじもいれず。見まはし給へば、ぜんごにつはものみちゝたり。わがかたざまのものは一人も見えず、やがてくるまをよせて、とくゝと申せば、大なごん心ならずのり給ふ。

たゞ身にそふものとは、つきせぬみだばかりなり。しゅじやくをみなみへゆけば、おほ  
(う)ち山をいまはよそにぞ見給ひける。としごろみなれしものども、いま此ありさまを見  
て、なみだをながしそでをしぼらぬはなし。ましてみやこにのこりとゞまり給ふきたのかた、  
きんだちの心のうち、をしはかられてあはれなり。たとひちうくはをかうぶつて、をんごくへ  
ゆくものも、人一兩人はそへぬやうやあると、くるまのうちにてかきくどきなき給へば、ちか  
ふ候ぶしども、みなよろひのそでをぞぬらしける。とば殿をすぎ給へば、きたの御所へ御かう  
なりし御ともには、一どもはづれざりし物をとて、わがさんごうのすはまどのとてありしも、  
よそに見てこそとをられけれ。みなみのもんにもなりしかば、ふねをそしとぞいそぎける。大  
なごん、これはいづちやらん、おなじくはうしなはれば、みやこちかきこのへんにてもあれか  
しとの給ひけるぞいとをしき。ちかふ候ぶしはたそととひ給へば、なんばの二郎つねとをと  
申。このへんにわがかたざまのものやある。ふねにのらぬさきにあとにいひをくべき事ありと  
の給へば、つねとをはしりまはりて、此かたの人や候と、たづねけれ共、われこそとなるも  
のみなし。われ世にありしときは、したがひつくものども、一二十人もありけんものを。いま  
はよそにてだにも見をくらぬ事のかなしさよとの給へば、ものゝふどもみなよろひのそでをぞ  
ぬらしける。くまのまふで、天わうじまうでのありしには、二ツかはらの三ツむねつくりのふ  
ねにのり、つぎのふね二十そうこぎつゞけさせ、さこそめでたふおはせしに、いまはけしか  
るかきすえやかたのふねに、大まくひきまはさせ、見もなれぬつはものどもにのりぐして、け

ふをかぎりにみやこのうちをいで給ふころのうちこそかなしけれ。その日はつの國大もつのもうらにぞつき給ふ。

此人すでにしぎいにおこなはるべかりしを、るぎいになだめられ給ふ事は、こまつどのゝおしふし申されけるによてなり。この大なごんいまだ中なごんたりしとき、みのゝ國をちぎやうし給ふに、さんもんのかやうひらのゝしやうの神人、もくだいゑもんのかうまさともとことひきいだしてすでにらうぜきにをよぶ。神人三人やにはいころさる。これによつて嘉應元年十一月三日、さんもんの大しゆほうきして、こくしなりちかるぎいにしよせられ、もくだいゑさともきんごくせらるべきよしそうもんす。君大きにおどろかせ給ひて、なりちかをびつ中の國へながさるべしとて、同十日すでにしの七でうまでいだされたりけるを、君いかゞおぼしめされけるやらん、同十六日にし七でうよりめしかへさる。さんもんの大しゆ此事をうけ給り、おびたゞしくじゆそすときこえしかど、同二年正月五日、なりちかうへもんのかみをかねて、けんびいしのべつたうになり給ふ。じうあん二年七月廿一日、じゆ二ゐにじよせらる。そのとき、すけとも、かねまさのきやうこえられ給ふ。すけとものきやうはふるき人、おとなにておはしき。かねまさのきやうはゑいぐはの人なり。かちやくにてこゑられ給ふぞいこんなる。

すけとも  
寶方(覺一本)。

同三年四月十三日、正二ゐにじよせらる。こんどは中のみかど中なごんかねいへのきやうこえられ給ふ。安元ぐはん年十月廿七日、けんびいしべつたうよりごん大なごんにあがり給ふ。か様にときめき給ひしかば、人あざけつて、さんもんの大しゆにはのろはるべかりし物をとぞ申

ける。をよそかみのばち、人ののろひ、とをきもあり、おなじからざる事どもなり。

おなじく三日、大もつのうらに京より御つかひありとてひしめきけり。大なごんこゝにてうしなへどやときゝ給へば、さはなくして、びぜんのこじまへながさるべしとなり。こまつどのよりも御ふみあり。みやこちかきかた山ざとにもをきたてまつらばやと申つれどもかなはぬ事こそ、世にあるかひも候はね。されども御いのちばかりは申うけて候とて、なんばがもとへも、あひかまへてよくゝみやづかい申せ。御心にばしたがひたてまつるなどおほせられ、たびのよそをひまでもこまゝとさたしをくられけり。大なごんさしもかたじけなふおほしめされ(ける)君にもはなれまいらせ、つかのまもはなれがたふおもはれしさいしにもわかれ、いづちへともゆくらん。二たびこきやうへかへりて、あひ見ん事もありがたし。一とせさんもののそしうによて、びつ中へながさるべきにて、すでににし七でうまでいでたりしかども、なか五日にしてやがてめしかへされぬ。これはさせる君の御いましめにてもなし。こはいかにしつる事ぞやと、天にあふぎちにふして、かなしみ給ふぞあはれなる。すでにふねをしいだしてくだり給ふに、みちすがらたゞなみだにのみしづみて、ながらふべしとはおぼえねども、さすがに露のいのちきえやらで、あとのしらなみへだゝれば、みやこはしだいにとをざかり、日かずやうゝかさなれば、をんごくもちかづきぬ。あさましげなるしばのいほりにいれたてまつる。しまのならひにて、うしろは山、まへはうみなれば、きしうつなみ、まつふく風、いづれもあはれはつきもせず。



大なごん一人にもかぎらず、かやうにいましめらるゝともがらおほかりけり。あふみの中將にうだうちくぜんの國、山しろのかみもとかねいづもの國、しきぶのたゆふまさつなおきの國、そうはうぐはんのぶふさとさの國、しんへいはんぐはんすけゆきみまさかの國、しだいにはい所をさだめらる。にう道しやうこく、ふくはらのべつぎうにおはしけるが、みやこにましますおとゝのさいしやうのもとへししやをたて、せうしやういそぎこれへくだされ候へ。ぞんずるむねありとの給へば、さいしやう、さらばたゞありしときともかくもなりたりせば、ふたゝび物をばおもはじとぞの給ひける。さらばとくゝいでたちくだり給へとありければ、なくゝいでたゝれけり。女ばうたち、あはれさいしやうのなをもよきやうに申されよかしとぞなげかれる。さいしやう、ぞんずるほどの事をば申しつ。いまはよをすつるよりほかは、なに事をか申候べき。たとひいづくのうらにもおはせよ、わがいのちのあらんかぎりは、いかにもとぶらひ申べしとぞの給ひける。せう將こんねん二さいになり給ふわかぎみましゝけり。此ごろはわかき人にてきんだちなどの事をもこまやかにのたまはざりけるが、いまはのときになりしかば、さすが心にかかりけん、おさなきものを一め見候はばやとの給ひければ、めのとの女ばういだきたてまつりてまいりたり。せう將わかぎみをひざのうへにをき、かみかきなで、むざんやなんぢが七さいにならば、おとこになしうちへまいらせんとこそおもひつるに、いまはかゝる身になりぬれば、いふにかひなし。もしなんぢいのちいきて、ことゆへなくおひたちたらば、ほうしになり、わがごせをとぶらへよとの給ひもあへずなき給へば、見る人そでをぞし

ぼりける。ふくはらのつかひは、つのさへもんもりずみといふものにてぞありける。こんややがてとばまでいでさせ給ひて、あかつきふねにめさるべう候と申せば、せうしやう、いくほどのぼざらんいのちに、こよひばかりはみやこのうちにてあかさばやとの給へども、御つかひしきりにかなふまじきよし申ければ、せうしやうその夜とばまでいで給ふ。

六月廿二日ふくはらへくだりつき給ひければ、にう道せののを太郎かねやすにおほせて、せうしやうはびつ中せのをへくだされけり。かねやす、さいしやうのかへりき、給はんところをおそれ、みちのほどやう／＼いたはりなぐさめたてまつる。されどもせうしやうは一かうほとけの御なをとなへて、ちゝの事をぞいのられける。

すでにびつ中のせのをにつき給ふ。さるほどに大なごんをば、びせんのかじまにをきたてまつりけるを、これはふなつちかきところにてあしかりなんとて、なんばがはからひにて、ちへわしたてまつり、びせんとびつ中とのさかひに、にはせがう、ありきのべつしよといふところにをきたてまつる。それよりせう將のおはするびつ中のせのをはわづかに一りあまりのみちなり。せう將そなたの風もなつかしうやおもはれけん、せのを、ちかふめして、や、かねやす、たうじこれより大な言どの、おはすありきのべつしよとかやは、いかほどのみちやらんとどひ給へば、せのをしらせまいらせては、あしかりなにとやおもひけん、これより十三日のみちにて候とぞ申ける。せう將、これこそ大きに心えね、日ばんこくはむかし三十三かこくにてありけるを、六十六かこくにはわられたんなり。あづまにきこふるではみちのくりやうこく(も一國)

なりけるを、もんむ天わうの御とき、十二ぐんをわけて、ではの國をたてられたり。一でうの  
みんの御う、さねかたの中將、あふしうへながされたりしに、たうこくのめい所あこやのまつ  
といふ所を見んとて、國のうちをたづねまいるが、あはでかへりけるに、みちにて、らうおう  
一人ゆきあふたり。中將、や、御へんはふるひ人どこそ見ゆれ。たうこくのめいしよ、あこやの  
まつといふところやしりたるとふに、まつたくたうこくには候はず、ではの國にてや候らん  
と申ければ、中じやう、さては御へんはしらざりけり。よのすゑになれば、めいしよもはやよ  
びうしなひたるにこそとて、すぎけるに、らうをう中將のそでをひかへて、君はよな、

みちのくのあこやのまつにこがくれていづべき月のいでもやらぬか

といふうたの心をもつて、たうこくのめいしよとは候か。それは六十六か國、りやうこくが一  
こくなりしときよめるうたなり。十二ぐんをさきわけてのちは、ではの國にや候らんと申けれ  
ば、そのとき中將、さもあるらん、やさしふもこたえたる物かなとて、ではの國へこえてこそ  
あこやのまつをば見たりけり。びぜんびつ中びごもむかしは一こくなりけるを、いまこそ三か  
こくにはわけられけれ。つくしのだざいふよりみやこへはらかのつかひののぼるこそ、かちど  
十五日とはさだめられたれ。すでに十三日と申は、ほとんどちんぜいへ下かうござんなれ。  
びぜんびつ中のさかひとをしといふとも、りやう三日にはよもすぎじ。ちかきをとをくいひな  
すは、大なごんどの、おはする所をなりつねにしらせじと申にこそとおもはれければ、その、  
ちはこひしけれどもとひ給はず。

## 三人きかひがしまへながさるゝ事

さるほどにほつしうじしゆぎやうしゆんくはん、へいはうぐはんやすより、びつ中せのをにおはするせう將あひぐして三人、さつまがたきかいがしまへぞながされける。此しまはみやこをいでゝはるゝとうみをわたりてゆくしまなり。おぼろげにてはふねも人もかよふ事なし。しまにも人まれなり。をのづからあるものは、此ちの人にもにず。いろくろふしてうしなんどのごとし。身にはしきりにけをひ、いふことばもきゝしらず、おとこはゑぼしもきず、をんなはかみをもさげず。いしやうなければ人にもにず。しよくするものなければ、たゞせつしやうをのみさきとす。しづが山だをたがやさねば、べいこくのたぐひもなし。そのゝくはをとらざれば、けんめんのたぐひもなかりけり。しまのうちにはかうざんあり。山のいたゞきにはひもえて、いかづちつねになりあがりなりくだり、ふもとには又あめしげし。一日へんじも人のいのちあるべしとも見えざりけり。いわうといふものみちみてり。かるがゆへにいわうがしまとぞ申ける。されどもたんばのせうしやうのしうと、平さいしやうのしよりやう、ひぜんの國かせのしやうより、いしよくをつねにをくらければ、しゆんくはんもやすよりも、いのちいきてすごしけり。やすよりは、ながされけるとき、すはうのむろとみといふところにてしゆつけしてんげれば、ほうみやうしやうしうとぞなのりける。しゆつけはもとよりのぞみなりけれ

ば、やすよりなく／＼かうぞ申ける。

つゝめにかくそむきはてける世の中をとくすてざりしことぞくやしき

とかきてみやこへのぼせたりければ、とゞめをきしさいしも、いかばかりの事をかおもひけん。さればはんぐはんはんにう道は、もとよりくま野しんかうの人にて、あはれいかにもして此しまのうちにくまの三じよごんげんをくはんじやうしたてまつり、きらくの事をいのらばやといふに、しゆんくはんこれをもちひず。二人はどうしんにして、もしくはまのにたるところやあると、しまのうちをたづねまはるに、あるひはりんたうのたへなるもあり、こうきんしうのよそをひしな／＼に、あるひはうんれいのさかしきあり、へきられうのいろ一ツにあらず。山のけしき木のこだち、よそよりもなをすぐれたり。みなみをのぞめは、かいまん／＼として、くものなみけぶりのなみいとふかく、きたをかへりみ見れば、又さんがくのがゞたるより、はくせきのたきみなぎりおちたり。たきのをとことにすさまじく、まつかぜかみさびたるすまゐ、ひれうごんげんのおはしますなちの御山にさもにたりけり。さてこそ、やがてそこをばなちのお山とはなづけけれ。此みねはほんぐう、かのみねはしんぐう、こゝは此わうじ、かしこはかのわうじなどゝ、わうじ／＼のなを申て、やすよりにう道せんだちにて、せうしやうあひ具し、まい日くまのまふでのまねをして、きらくの事をぞいのられける。なむごんげんこんがうどうじ、ねがはくはあはれみをたれさせおはしまし、われらを二たびみやこへかへしいれて、こひしきものどもをいま一たび見せ給へとぞいのりける。

あるときせうしやう、はんぐはんとう道、二人ごんげんの御まへにまいり、つうやしたりけるに、ゆめともなくうつゝともなきに、おきよりせうせん一そうよせたり。れいのおまをぶねつりぶねかと見るほどに、いそによりて、あかきはかまき、かけをびなどしたる女ばうの五六人、御まへにまいりて、よにもおもしろきこゑにて、

よろづのほとけのぐはんよりも、千じゆのちかひぞたのもしき、かれたる木にもたちまちに、はなさきみなるとはきけ

と二三べんうたひすまして、かきけすやうにうせにけり。そのとき二人の人々うつゝなりけりと、きめのおもひをなす。此ごんげんのほんち、千じゆくはんをんにておはします。千じゆの甘八ぶしゆのうちに、かいりうじんその一ツなり。さればりうによのけげんにてもやあらんとたのもしかりし事どもなり。日かずつもりてたちかへべきじやうゑもなければ、あさのころもを身にまとひ、けがらはしき心あれば、さはべのみづをこりにかき、いはたがはのきよきながれとおもひやり、たかきところののぼりては、ほつしんもんとぞくはんじける。御へいのかみもなければ、はなをたおりてさゝげつゝ、やすより入道つねはのつとぞ申ける。

いひあたるとしなみ、おしう元年ひのとのとり、月のならばは十月ふた月、日のかずは三百五十よか日、そのうちにきちにちりやうしんをゑらび、かけまくもかたじけなく、日ぼんだい一大りやうけん、くまの三所大ごんげん、ならびにひれう大さつたけうりやう、うづのひろまへにして、しんじむの大せしゆ、うりんふちはらのなりつね、しやみしやうしう、一

しんしやうぐのまことをいたし、三ぐうさうおうの心ざしをぬきんで、つゝしみうやまつてまうす。それしうじやう大ぼさつは、さいどくかいのけうしゆ、三じんゑんまんのかくわうなり。りやうしよごんげん、あるひはどうばうじやうるりいわうのしゆ、しゆびやうしつぢよのによらいなり。あるひはなんばうふだらくのうげのしゆ、にうちうげんもんの大じなり。にやくわうじはしやばせかいのほんしゆ、せむいしやの大じなり。ちやう上につめんをげむじて、しゆじやうのしよぐはんをみて給へり。これによてかみ一人よりしもばんみにいたるまで、あるひはげんせあんおんのため、あるひはごしやうぜんしよのために、あしたにはじやうすいをむすび、ぼんなうのあかをすゝぎ、ゆふべにはしんざんにむかひほうがうをとなふ。かんおうおこたる事なし。がゝたるみねのたかきをば、しんとくのたかきにたとふ。けんゝたるたにのふかきをば、ぐぜいのふかきにたとふ。くもをうがちてのぼり、露をしのぎてくだる。こゝにりやくのちをたのまずば、いかでかあゆみをけんなんのみにこばん。ごんげんのとくをあふがずば、いかゞゆうをんのさかひにましまさんや。よてしようにやう大ごんげん、ひれう大さつた、あひともしやうれんじひのまなじりをならべ、さをしかの御みゝをふりたて、われらむ二のたんせいをちけんし、いちゝのこんしをなうじゆせしめ給へ。しかればすなはちなりつね、しやうしう、ゑんたうはいるのくるしみをしのぎ、きやうじやうくはらくのこきやうにつけせしめ給へ。まさにうむまうじうをあらため、むめのしんりをきよむべし。しかるときは、むすぶはやたまのりやうしよはずいきし、ある

ひはうえんのしゅじやうをみちびき、又みだりにむゑんのぐんるいをすくはんがため、七はうしやうごんのすみかをすてゝ、八まん四千のひかりをやはらげ、六だう三うのちぎりにおなじふし給へり。かるがゆへにちやうごうも又よく、うたゞちやうじゆをうる事をもとむ。らいはいしてそでをつらね、へいはくをさゝぐる事ひまなし。にんにくのころもをかさね、かくだうのはなをさゝげ、しんでんのゆかをうごかし、しんじむみづをすましめ、りしやうのいけにたとふ。しんめいなうじゆし給はゞ、しよぐはんいかゞじやうじゆせざらん。あふぎねがはくは、十二しよごんげん、りしやうのつばさをならべて、はるかのかいかいのそらにかけり、させんのうれへをやすめて、はやくきらくのほんくはいをとげしめ給へ。さいはい  
く。

とぞ申ける。

あるときおきよりふきくる風の、せうしやうやすより二人がそでにこのは一ツづゝふきかけた。これをとりに見れば、たのみをかくる御くまのゝなぎのはにてぞありける。むしくひあり、これを一しゆのうたにぞよみなしたる。

ちはやぶるかみにいのりのしげければなどか都へかへさざるべき

かへすゝもめでたかりける事どもなり。はんぐはんにう道あまりにみやこのこひしきまゝに、せめてのはかりごとに、千ぼんのそとばをつくり、あじのぼんじをかきて、ねんがう月日、けみやう、じつみやう、さて二しゆのうたをかきたりける。



さつまがたおきのこじまにわれありとおやにはつげよ八えのしほかせ

おもひやれしぼしとおもふたびだにもなをふるさとはこひしきものを

これをうらにもちていで、なむきみやうちやうらい、ぼんでんたいしやく、けんらうちじん、わうじやうのちんじゆしよ大みやう神、ことにはくまのゝごんげん、こんがうどうじ、いつくしま大みやう神、ねがはくは此そとぼを一ぼんなりとも、みやこのうちへつたへてたばせ給へとて、おきつしらのなみの、よせてはかへるたびごとに、そとぼをうみにぞうかべける。日かずかさなればそとぼのかずもつもりけり。そのおもふ心やたよりの風ともなりたりけん、又しんめいぶつだもやをくらせ給ひけん、千ぼんのそとぼのうち、一ぼんはあきのいつくしまの大みやう神の御まへのなぎさにうちあげたり。此みやうじんと申は、しやかつらりうわうのだい三のひめみや、たいざうかいのすいじやくにてまします。しゆじん天わうの御うに、此しまに御やうがうありしよりこのかた、さいどりしやう、いまにいたるまで、じんぐゝきどくの事どもなり。さればにや八しやの御てんいらかをならべ、百八十けんのくはいらうあり。やしらはうみをうけたれば、うしほのみちて月ぞすむ。しほみちくれば、おほとりあのうちのかはいらう、あけのたまがきるりのごとし。しほひきぬれば、なつの夜なれども御まへのなぎさにしもやをく。はんぐはんによ道がゆかりありけるそうの、さいこくしゆぎやうしてまよひありきけるが、いつくしまへぞまいりたる。此しまはうしほのみつときはうみになり、うしほのひくときはしまとなるどころなり。それわくはうどうちんのりしやう、さまゝなりと申せども、此

しまのみやうじんはいかなるいんゑんをもつてか、かいまん／＼のうろくづにえんをむすばせ給ふらんと、ほんぜいのたつとさに、ひめもすほつせまいらせてゐたるところに、おきよりみちくるしほにさそはれて、それかともなくうちあげたるもくづの中に、そとぼのかたちの見えければ、なになふこれをとりに見るに、おきのこじまにわれありと、かきなしたることのはにてぞありける。もじをゑりいれきざみつけたれば、なみにもあらはれず、あざやかにこそ見えたりけれ。あなむざんや、これはやすよりにう道がしわざと見なし、なく／＼おめのかたにさし、みやこにのぼり、はんぐはんにう道がらうぼのにこうさいしななどが、一でうのへん、むらさきのにしのびつゝすみけるに、たづねてこのそとぼをとらせければ、らうぼのにこうもさいしもこれを見て、されば此そとぼのもろこしのかたへもゆられゆかずして、なにしにこれまでつたへきて、二たび物をおもはすらんとぞかなしみける。はるかにあつてえいぶんにをよびて、ほうわうそとぼをゑいらんあつて、あなむざんや、これはきかいがしまとかやにいまだながらへてありけると、あはれにおぼしめして、そのうちこまつのだいふのもとへ此そとぼををくらせ給ひけり。だいふこのそとぼをにう道に見せたてまつり給ひければ、しやうこくもいは木ならねば、あはれにぞの給ひける。かきのもとの人丸は、しまがくれゆくふねをおもひ、山べのあか人は、あしべのたづをながめ給ふ。すみよしのみやう神は、かたそぎのおもひをなし、みわのみやうじんは、すぎたてるかどをとさす。そさのをのみことは、三十一じをはじめをき給ひしよりこのかた、もろ／＼のしんめいぶつだも、このえいぎんをもつて、百千ばんた

んのおもひをのべ給ふ。さればたかきもいやしきも、きかいがしまのる人のうたどて、これをくちずさみぬはなかりけり。千ばんにをよびつくりたるそとばなれば、さこそはちいさふもありけめ、さつまがたよりはるくと、つたはりけるこそふしぎなれ。あまりにおもふ心のふかきしるしなりけるにや。

むかしかんわうこくをせめ給ふに、三十まんきのせいをもつてすといへども、ここのいくさこはくして、かんわうのいくさをつかへさる。そのち五十まんきのせいをもつてせめらる。なをもここのいくさこはふして、りれうといふ大將ぐんをはじめとして、千よ人とつてここのとゞめらる。その中にそぶといふしやうぐんをはじめて、むねとのもの六千人、すぐりいだしてがんくつにをつこめ、三ねんをへてとりいだし、かたあしをきつてをつはなつ。すなはちしするものもあり、ほどへてしするものもあり。そぶはかたあしをきられながらしなざりけり。山にいりてはこのみをひろひ、さとにいで、さはのねぜりをつみ、たのみにゆきてはおちぼをひろひなんどしてぞすごしける。田にいくらもありけるかりどもが、そぶにはや見なれて、おどろくけしきもなかりけり。そぶはこきやうのこひしきやうを一ふでかひて、なくなぐがんのつばさにぞむすびつけける。かひくしくもたのものかり、あきはかならずみやこへかへりきたるものなれば、かんのしうていしやうりんゑんにぎようありけるに、ゆふされのそらうすくもり、なにとなくものあはれなるおりふし、一つらのかりとびきたりけるが、その中に一ツとびさがり、わがつばさにむすびつけたるたまづさをくひきつてぞおとしける。くは

しうていー昭帝。

うれうー李廣

(覺一本)

それより—  
この前に覺一本には  
蘇武と李少卿との事  
がある

んにんこれをとつて、みかどへそうもんす。ゑいらんありければ、むかしはがんくつのほらにこめられ、むなしく三しうのしうたんをゝくる、いまはあれたのうねにすてられて、こてきに一そくの身となる。がいこつはたとひこくにちらすども、たましゐはかへつて二たびくんべんにつかへんとぞかひたりける。みかど御なみだをながせ給ひて、あなむざんや、いにしへこれはこくへつかはしけるそぶがしわざなり。命つきぬあひだにとて、此たびはうれうといふしやうぐんをはじめとして、百まんきのせいをおこしてこくをせめらる。こんどはこくのいくさやぶれて、みかたのたゝかひがちぬときこえしかば、そふ十九ねんのせいざうをくり、かたあしはきられながら、二たびこきやうへかへりけり。それよりしてこそふみをばがんしよ共いひ、つかひをばがんしともなづけけれ。かんかのそふはしよをかりにつけてきうりにをくり、ほんてうのやすよりは、なみのたよりにうたをこきやうにつたふ。かれはかりのつばさの一ふで、これはそとばのおもての二しゆのうた、かれはかんてう、これはほんてう、かれは上だい、これはまつだい、さかひをへだて、よゝはかはれども、ふぜいはおなじふぜいにて、ありがたかりしためしなり。

なりちかしきよ

しん大なごんなりちかのきやうはすこしくつろぐ心もやおもはれけるところに、しそくたんばのせうしやういげ、きかいがしまにながされぬるときゝて、こまつどのに申して、つみにし

ゆつけし給ひけり。きたのかたは、うんりんぬんにまし／＼けるが、さらぬだにすみなれぬ山  
ざとはものうきに、いとゞしのばれければ、すぎゆく月日もあかしかねくらしわづらふやうな  
りけり。女ばうさぶらひおほかりけれども、よにをそれ人めをつゝむほどに、とひとぶらふ人  
もなし。その中に大なごんのようにせうよりふびんにしてめしつかはれけるげんざゑもんのじよ  
うのぶとしといふさぶらひあり。なさけあるおのこにて、つねはとぶらひたてまつる。あると  
きのぶとしまいりたれば、きたのかたなみだをゝさへて、いかにやこれにはびぜんのこじまに  
ましますとこそきこえしか、たうじはありきのべつしよとかやにおはすなり。いかにもしてい  
ま一どふみをもたてまつり返事をも見んとおもふはいかにとの給へば、のぶとしなみだをし  
のごひて申けるは、さん候。ゆうせうより御なさけをかうぶりて、一日もはなれまいらす事  
候はず。御くだりのときも、さしもに御ともつかまつるべきよし申候ひしかども、にう道の  
御ゆるされも候はざりしかば、まいる事も候はず。めされ候ひし御こゑもみゝにとゞまり、い  
さめられまいらせ候ひし御ことばもきもにめいじて、いつわすれまいらせんともおぼえず候。  
たとひいかなるめにもあひ候へ、御ふみ給り候はんと申せば、きたのかた、やがて御ふみかき  
てぞ給はりける。のぶとしこれを給て、びぜんの國ありきのべつしよにたづねくたる。しゆこ  
のぶしにまづ此よし申ければ、ぶしどもたづねまいりたる心ざしのほどをあはれみて、やがて  
大なごんにう道のおはすところにぞいたりける。大なごんはたゞいまもみやこの事をの給ひ  
いだして、よにもこひしげになげきしづみてましますところに、みやこよりのぶとしがまいり

て候と申いたりければ、にう道き、もあへ給はず、おきあがりて、これへこれへとぞめされける。のぶとしまいりて見たてまつれば、御すまゐの心うさもさる事にて候へども、すみぞめのたもとにひきかへ給ふを見て、めもくれ心もきえてぞおぼえける。きたのかたのおほせをかうぶりしありさま、こまぐと申つゞけて、御ふみとりいだしてたてまつる。大なごんにう道どの此ふみを見給へば、みづくきのあとはなみだにかきくれて、そこはかとも見えねども、つきせぬものおもひにたへかね、しのぶべしとおおぼえず。おなさき人々もなのめならずこひしがりたてまつるありさま、こまぐとかゝれたりければ、大なごんこれを見給ひて、ひごろのおもひなげきはこのかずならずとぞなげかれける。かくて四五日すぎぬ。のぶとし、にう道の御まへにまいりて申けるは、これに候ていかにもならせまさん御ありさまを見はてまいらせう候へども、きたのかたあひかまへて、こんどの御かへり事を御らんせんと候ひしに、あともなくしるしもなくおぼしめさん事がつみふかくおぼえ候。こんどはまかりのぼつて、又こそまいり候はめと申せば、大なごん、まことにさるべし。ただしなんちが又こん事をまちつけべしとはおぼえねども、さらばとくくのぼれ。われいかにもなりたりときかば、あひかまへて、よくくごせとぶらへよとぞなかれける。のぶとし御返事給はつてのぼりけるに、にう道の給ふべき事はかねてみなつきぬれども、せめてのしたはしさのまゝに、たびくよびぞかへされける。さてもあるべきならねば、のぶとしいとま申て、のぼりけり。みやこへのぼりて、きたのかたへまいり、御返事をまいらせたりければ、あなめづらし、いのちのいま

までながらへておはしけるよとて、此ふみを見給へば、ふみのなかに御かみの一ふさ、くろぐとして見えければ、二めとも見給はず、はや此人さまをかへ給ひけり。かたみこそなかくいまはあたなれとて、これをかほにをしあて、ふしまろびてぞなき給ふ。おさなき人々もなきかなしみ給ひけり。

さるほどに大なごん入道をば、おなじく八月十七日、びぜんびつ中のさかひ、きびつの中山といふところに、つゝぬにうしなひたてまつる。さけにどくをいれてすゝめたてまつりけれども、なをもかなはざりければ、きしの二ちやうばかりあるしたにひしをうゑ、それにつきおとし、つらぬかれてぞうせ給ひける。きたのかたは、はるかにこれをつたへきゝ給ひて、かはりぬるすがたをいまたび見たてまつらばやとこそおもひつるに、いまはなにとかせんとて、うりんめんちかきばだいめんといふところにてさまをかへ、かたのごとくのぶつじをいとなみ、かのごせをぞとぶらひ給ひける。かのきたのかたと申は、山しろのかみあつかたのむすめなり。見めすがた心ざままでゆふなる人なりしかば、たがひに心ざしあさからざりしなかなり。わかぎみひめ君もはなをおり、あかのみづをむすびて、ちゝのごせをとぶらひ給ふぞあはれなる。ときうつりことさりて、よのかはりゆくありさま、たゞ天人の五すめとぞ見えし。おなじく十二月廿四日、けいせいというほうにいづ。しゆうきとも申、又けいせいとも申。天がみだれて、大ひやうらん國におこらんといへり。さるほどにとしくれておしうも二年になりにけり。

とく大じどのいつくしまさんけい

しげふぢー重兼  
(覺一本)

そのころとく大じの大なごんさねさだのきやう、平家のじなんむねもりに大しやうをこえられて、大なごんをもじゝ申て、ろうきよせられたりけるが、つらく此世の中のあるさまを見るに、にう道しやうこくの子ども、一もんの人々にくはんかひをこえらるゝなり。ともゝり、しげひらなんどゝて、しだいにしつゝかんずるに、われらいつか大しやうにあたつくべしともおぼえず。つねのならひなれば、しゆつけせんとぞおもひたゝれる。しよ大ぶさぶらひどもよりあひ、いかにせんとなげきあへり。その中にとうのくらんの大夫しげふぢといふものあり。なに事もぞんぢしたるものなりけり。さねさだの卿よろづものうくおもはれけるおりふし、心をすましたゝひとり月にうそぶきておはしけるところにまいりたり。いかにしげふぢ、なに事にまいりたるぞ。こん夜は月くまなふ候てとせんに候ほどにまいりて候と申せば、しんめうなり。それに候へ。ものがたりせんとぞの給ひける。かしこまつて候ひけるに、さねさだのきやう、たうじ世の中のあるさまを見るに、にう道しやうこくのことども、そのほか一もんの人々にくはんかひをこえらるゝなり。いまは大しやうにならん事もありがたし。つねの事なれば、世をすてんにはしかじ。しゆつけせんとおもふなりとの給へば、此御ぢやうこそあまり心ばそふおぼえ候へ。げにも御しゆつけなんども候はゞ、ほうこうのともがらのかなしみをばいかゞせさせ給ひ候べき。しげふぢふしぎの事をこそあんじいでゝ候へ。あきのいつくしまの



大みやう神は、にう道しやうこくのなのめならずそうぎやうし給ふかみなり。なに事もやうにこそより候へ。君いつくしまへ御まいり候て、一七日も御さんろうあり。大しやうの事を御きねん候はゞ、かのやしろには、ないしとて、ゆうなるぎちよどもにう道をかれて候なり。さだめてまいりもてなし申候はんずらん。さて御じやうらくのとき、御めにかゝりぬないしどもめしぐしてのばらせましまさんに、御ともにまいり候ほどでは、うたがひなくにし八でうへまいり候はんず。にう道しやうこく、なに事にのぼりたるぞやとたづねられれば、ありのまゝにぞ申候はんずらん。さてはとく大じどのは、じやうかいがたのみたてまつるかみへまいりけるこそござんなれとて、きはめて物めでたがりし給ふ人にて、よきやうにはからひもや候はんずらんと申たりければ、さねさだのきやう、まことにめでたきばかりごとなり。かやうの事いかでかおもひよるべきとて、やがてしやうじんはじめて、いつくしまへぞまいりける。さいこく八えのしほちへおもむき、おほくのうら／＼しま／＼をしのぎつゝ、いつくしまへまいりけり。しやとうのありさま、つたへきくほうらい、ほうぢやう、ゑいしうもこれにはすぎじとぞ見えし。七日さんろうありけるに、ないしどもぶがくも三かどおこないて、もてなしたてまつる。さねさだのきやういまやううたひらうゑいして、しんめいにほうらくあり。ゑいきよくどもねんごろにないしにをしえさせ給ひけり。平家のきんだちこそつねには御まいり候に、めづらしき御まいりなり。なに事の御いのりやらんと申ければ、大しやうを人々にこえられて、大なごんをじゝ申て、此五六ねんろうきよしたりけるが、もしやとおもひてそのきせいのために

まいりたるとぞの給ひける。さんろうみちてみやこへのぼり給ふに、むねとのわかないしも廿よ人なごりをおしみてふねをしたてをくりしに、いとま申てかへらんとしければ、あまりになごりのおしきに、いま二日ちをくれ、いま三日ちなどの給ふに、みやこまでこそまいりけれ。とく大じの御ていへいらせ給ひて、さまざまもてなし、ひきでものたまはつていだされけり。これまでのぼりたるほどでは、いかでかわがしうのにう道どのへまいらざるべきとて、にし八でうへぞまいりたる。にう道しやうこく、やがていであひたいめんして、いかにないしども、なに事のれつさんぞ。とく大じどのいつくしまへ御まいりあつて、一七日こもらせたまひつるが、一日ちをくりまいらせよ。二日ちをくりまいらせよとて、これまでめしぐせられて候。とく大じはなにごときのきせいにまいられたりけるやらん。大しやうのいのりとこそさぶらひしかと申せば、そのときうちうなづみて、あないとをしや、とく大じはじやうかいがたのみたてまつるいつくしまへまいりて大しやうのいのり申されけるござんなれ。これをばいかでよきやうにはからはではあるべきとて、ちやくしこまつどのない大じんさ大しやうにておはしけるをじゝたてまつりて、じなんむねもりのきやうのう大しやうにてましゝけるをこえさせて、とく大じをさ大しやうにぞなされける。やさしかりしはかりことなり。しん大なごんなりちかのきやうにかしこきはかりごとおはし給はで、よしなきむほんをおこして、はいしよの月に心をみがき、つみにしやめなくなりてうせ給ひけるこそくちおしけれ。